

小田実全集（小説 第20巻）

ベトナムから遠く離れて（一）



講談社

小田実全集

Makoto Oda



目次

第一章	6
第二章	79
第三章	168
第四章	255
第五章	345

ベトナムから遠く離れて
(一)

第一章

一

そのお、か、ま、と仲間から呼ばれる少年の家は街を見下す高台——いや、それはもう街の背後にかなり激しい傾斜でそそり立つ山の一部と言うべきものだろうか、国土地理院発行の縮尺五万分の一の地図で少年が測定したところでは確実に海拔八十メートルほどにはなっている地点にあつて、そこから見下すと港都の中心部と港都がご自慢にしている、その生命とも心臓とも言うべき港の全景がくまなく見えた。ことにお、か、ま、の部屋は、このあたりを題材にしたテレビ・ドラマが話題になつて以来激しい息づかいとともにあえぎあえぎ上つて来るもの好きな観光客たちによつて「異人館」というぐあいにあこがれの眼とともに語られる古風な木造三階建ての洋館の三階にあつて、そこは傾斜した天井をもつ屋根裏部屋めいた六畳ほどの大きさの部屋だが南方と東方にむかつて大きく開いた窓をもつていて、眺望は南方の窓のかなり下のところに見える「眺望絶佳・百万ドルの夜景」を誇る（そんなぐあいに港都の宣伝雑誌やなけなしの異国趣味エキゾチズムを求めて遠隔の地からもわざわざ旅してやつて来て街をもの欲しげにさまよい歩く若い女性むけの絵入り雑誌にはいつもその店の名前は出ていた）フランス料理店「マルセーユ」よりもはるかにいいとお、か、ま、は自分で思つていた。もちろん、それは少年の思い込みだけのことではなくて、彼の部屋は海拔の高度もかなり「マルセーユ」より高い上に、「マルセー

ユ」のようにすぐまえにそびえ立つそのあたりに多く住むインド人経営のマンションのベランダの存在をことさらに無視するようにして街景やらそのむこうの港の風景やらを見下すというのではなかった。おかまの家は街の中心の国鉄と私鉄とが集中する大きな駅（のまわりはデパートやら商店やらレストランやらバーやらキャバレーやらがむらがつて形成する繁華街になつていた）からあたかも一本道をたどるようにしてほとんどまっすぐに上つて来たどんづまりの、そこからはもう本格的に山地が始まるという街のおしまいであれば山地のおしまいでもある地勢に位置していたから、昔からの彼の家類似の「異人館」であろうとこのごろできの背丈の高いマンションであろうと、あるいはそのあいだにはさまれた場ちがい貧弱な庶民のくすんだ住宅であろうとすべては部屋から見下すおかまの眼下に平べったく這いつくばっているように見えた。

おかまは窓のすぐそばにベッドをもつて来ていて、そこに半ば身を起こすようにして横たわっていると、そのままの姿勢でそれら屋並みのつらなりが、まずつい下のおかまの母親に言わせると貧乏な西洋人と日本人のもの好きが住む木造のアパートの褐色の瓦ぶきの屋根から始まつて順次下にまるで段々畑のようにしてひろがつて行くのが見えるのだが、そのはてに駅近くの繁華街の大きさまざまのビルディングが立っていた。ビルディングのなかで眼立つのはこの街随一の高さを誇る貿易センター・ビルだったが、まるで長方形の箱をタテにおいたような無趣味なビルディングの頂きもおかまの視線よりも少しばかり下方のところに見えて、おかまはそれを見るたびにいつもぎまみやがれと思つた。そのビルディングの最上階にもレストランがあつて、そこもちろん高さと眺望を売り物にしたレストランだったが、おかまは夜、そこに灯がついているのを見ると、レストランのなかでもつたいぶつ

た顔で食べている、それぞれに自分を裕福でもあれば社会の高みのところに立っていると考えている男女の群れを見下している気になった。

そのビルディングのさが海だった。いや、そこはコンテナ船をむかえ入れるためにこの都市が十年ほどまえにつくり出した埋め立て地の新しい港で、朱色の大きなアーチ型の橋を渡って行くと到達できるその埋め立て地には巨大なクレーンが右から左へ十一基つらなっているのが見えた。たいていの場合、船体を半ば白くぬったコンテナ船が二、三隻、そのクレーンのつらなりのまえにとまっていた、だいたい一日二日で何万トンというトン数のそれらのコンテナ船は交代する。埋め立て地の右手はそのままずっともとの港のひろがりにつづいていて、間抜けでぶざまなかつこうをして立つ「ポート・タワー」と称する展望塔の鉄塔のあたりまで何本か突堤が鈍く陽光に光る海に突き出ている。突堤の姿は前面のビルディングやら倉庫やらの建築物にさえぎられて見えなかったが、ここにとまっている船のマストや煙突は建物のつらなりの間隙を縫うようにして突出して見えた。「ポート・タワー」のさらに右手は造船所で、船台が大きく右手から左手に横に突き出ている上に埋め立て地のクレーンよりもさらに大きなクレーンが蟹のハサミのように左右に尖端をひろげるようにして何基かつづき、じつと見ていると、ときどき蟹のハサミはゆつくりと動く。

その窓は真南をむいている窓で晴れていると太陽の光はいっぱいに入ってきて夏のあいだはぶあついカーテンを下ろさないとやって行けないほどだったから、ベッドの上に横たわったおかまがそんなふうにして下の街と港の風景に見入るのは冬のあたたかい日の朝が十時ごろから午後二時、三時にかけての時刻で、ときにはただそれだけのたのしみのためにおかまは学校へ行くと行って朝がたいつ

たん外へ出ながら、十時すぎにそこから時間をすごして帰つて来てから塀をよじ登つて二階のあらかじめ開けておいた窓から入つて三階の彼の部屋に至るといふルートでひそかに部屋にたどり着くと、そのまま午前から午後をそこで本を読んだりステレオのロック音楽をヘッド・ホーンで聞いたりしながら陽光をいっぱい浴びて時間を過ごした。すつきりと晴れていると、ときにはそこから海の彼方に横たわる遠くの島の姿も、あるいは、この港都と西方の港都よりひとまわり大きい都市とそのさきずつと長く伸びる半島によつて取り囲まれた湾のたたまいも大きく見えて来て、彼は自分が宙空にひとり放り出されているような感じをもつた。いや、彼はそんな感じをもちながら窓の古風なスチールの枠によつて固定された空間のなかにいるのだから、その感覚はどこか高所に吊り出された鳥籠のなかにいるという感覚だつたと言つたほうがさらに正確だつた。実際、半ば起こしたからだをベッドに沈めて視線を窓の上いっぱいひろがる蒼空にむけると、自分のからだのまま宙空にむかつてせり出されて、そこで宙吊りになつている氣になつた。トンビが大きく翼をひろげて何羽も悠々と彼の頭上を舞つていて、ときにはおどろくほど窓の間近までやつて来るがあつて、おかまは彼らが窓のなか——彼の鳥籠のなかにまで入つて来るのを期待して窓を開放したまま何時間か過ごしたりする。残念ながら、まだそういう幸運が彼の鳥籠を訪れたことはなかつたが、トンビをじつと見ているうちに、彼は自分がトンビになつて空を舞っているような感覚をもつた。

トンビを見るのに飽きると、あるいは、どこかに何か獲物が出現したのだろう彼らがあわただしく姿を消すと、おかまは部屋の中央の、下の街頭に棄ててあつたのを拾つて来たスプリングが半ば露出したソファに腰を下ろして、東方の窓の外の風景に眼をやつた。そのときにはたいてい直下の街の繁

華街のカメラ店でバーゲン・セールをやっていたときに買って来た倍率七・五の双眼鏡を使って見るのだが、眺望が東方にむかっても開けているのは彼の家が高台の突き出したところにあつてすぐ下が市の水道の貯水池になつていたからだ。東方の窓の下すぐに見るからに冷たい水をたたえた大きなプールまがいの貯水池を見るためには身を起こして窓のそばにまで近づいて行く必要があつたが、そこからさらに「下界」に降りたあたりからまつすぐに東方へ伸びて行く大通りはソファに坐つたまま十分に見えた。その大通りを下からたどつて視線を上げて行くと左方から伸びて来るいくぶん赤味がかつた薄紫色の真冬の山脈の稜線に突きあたるのだが、その薄紫色と激しい対照をかたちづくつているのが下方に稜線と平行線をたどるようにして左から右へゆるやかな傾斜で下降する白い屋並みのつらなりで、それを見ているとおかまはここが日本であることを忘れる氣になつた。だいたいがそのあたりはマンションやら団地やらの建物が多いのだろう、屋並みのたいていが白いビルディングでたしかに日本離れしているのだが、「ナポリみたいだ」とおかまがいつか見た絵ハガキの写真を思い出している、さつきは「ベイルートみたいだよ」ともつと凝つた印象を口に出していた。さつきはもとほ外交官だつた父親に従つて世界のあちこちに移り住んで来ていたからその点でもおかまはかないっこなかつたが、さらにさつきは「サンフランシスコもこんな感じだ」とか「アルジェリアのアルジェ、あそこもこんなだよ」とかどこまでがほんとうでどこからがはつたりであるのか区別のつきがたい口のきき方をつづけた。おかげでそのあと双眼鏡のレンズを東方の風景にむけるたびにまだ見ぬナポリやらベイルートやらサンフランシスコやらアルジェやらの光景が眼のまえに散乱して来る感じをおかまはもつのだが、おかまが双眼鏡のレンズを通してその白い屋並みのつらなりのなかにとりわ

け求めるものは二つあつて、ひとつは窓の右手に見える遊園地の観覧車の大きな輪だった。私鉄の駅で三つぐらい離れたところにその遊園地はあつたから相当な距離のむこうにその輪は見えて来ているはずだったが、かなり巨大なものなのだろう、赤、ミドリ、黄など色とりどりの観覧車をつけた輪がゆつくりとまわつて行くのがレンズのなかに見えた。

その輪の廻転を見るのが彼の東方眺望のはじまりなら、ファイナレとなる行事は窓の左のはしところに見える、港都ではかなり名前の知れたミッシヨン・スクールの女学校の建物の尖塔の上に立つ聖母マリアの像にレンズの焦点をあてることだった。真南、海のほうを見て彼女は立っていたからおかまからは彼女を横手から眺めることになって、いくぶん前かがみになったそのスラリとした姿態は近くで見ればコンクリート造りの殺風景なものだったが、建物全体がレンズの円環のなかにおさまりきるほどの距離をへだててみると、ふしぎに高貴な感じをあたえる立像になっていた。ことにその感じになるのは夕刻、西方からの夕陽の光が横むきにあたつて灰白色のコンクリートが真紅とまではとうてい言いがたいにしてもかなりな赤味を帯びてレンズの底に沈んだように見えて来るときで、おかまはそんなときにはおしまいはぐつたりと疲れてベッドの上に横たわるまで何かものに取り憑かれたように双眼鏡をのぞいた。もちろん、その夕刻の西方から夕陽が街並みを照らし出すころには白い屋並みも赤味を帯びてつらなれば、屋並みの処々方々に開いた窓のガラスがキラキラと輝きもして、ときにはおかまは眺めていたため息をつきたくなるほどの興奮を心の底におぼえた。

それから、ゆつたりと夜が来た。そのときにはおかまはまたベッドの上に半ば身を立てて南方の夜景に見入るのだが、その夜景の眺めが「百万ドルの夜景」を誇るフランス料理店「マルセーユ」から

のものよりもいつそうすぐれたものであるとあらためて彼は認識するのだ。すぐ手前はただの屋根のつらなりでよほどの月の光が無ければどのようにも輝くことのない暗さだが、それはすぐ終つて、そこから急に切れ込むようにしていちめん光の海が左右にひろがる。それはたえず呼吸をしているみたいにたえまなく点滅する光の海だったが、そのさらにむこうに本物の海のたいいは月の光でうすらと冷たく輝いたひろがりが見えて、ときにはそこをこまかな光のつぶつぶをマストに点々ときらめかせた船が通り過ぎた。

そうした夜景に見入りながらおかまが冬のさなかでもときどき窓を開けたのは、もちろん、部屋の片隅に燃えるガス・ストーブの換気のためでもあつたが、もうひとつ、窓を開けるとたちまち下方からウォーンと潮騒のように湧き上つて聞こえて来る光の海全体の音を聞くためでもあつた。昼でももちろんその音はして来たが、やはり、夜のほうが世界全体がしずかになつてゐるのだろう、いつそうまとまつた音として眼下から上つて来て、おかまは視覚と聴覚の双方で光の海の眼くるめく全体にむきあつてゐる感じになつた。

それに夜は——もちろんもうそれは両親も兄も姉も、あるいはお手伝いのキヨちゃんも決してこの三階の屋根裏にまで上つて来ない、あるいは上つて来てても鍵を嚴重にかけたこの部屋の扉を開けるまでに眠つたふりをよそおつてそれまで身に着けたものをすばやく脱いで。パジャマに着替えるだけの時間を稼げる時刻のところだったが、おかまが対する窓の外の景色が昼のそれとはまつたくちがつた暗黒のなかの光の海であるように、電気を消した暗黒のなかのベッドの上に半ばからだを起こして横たわるおかもまた昼間とはちがつたおかまだつた。すくなくとも彼はそんな気持で光の海に対していて、

彼の名前もそのときには昼間の紀彦という名前とは似ても似つかぬローラという名前でもあれば、身に着けているものも紺のネクタイに紺のブレザーという彼の高校のいかにも港都のお坊ちゃん学校らしいそれなりにしゃれた制服でもなければ本来はベッドに入つてすでに眠つてることになつていゝ彼が身に着けているはずのタオル地のパジャマでもなく、素肌にすべすべとした感触をあたえてそれがそのままからだじゅうを貫通して行くような快感となつていゝ一枚のスリッパだった。彼はそのスリッパを二枚もつていて、一枚は純白、もう一枚はそれとまったく対照的に漆黒の闇のように真黒いスリッパで、二枚ともに下着マニアとも言える母親の豊富なワードローブから盗んでもつて来たものだが、おかまはその夜の気分によつて純白のものを身に着けたり、黒のスリッパにもした。純白のスリッパを着ているローラはまだ嫁入り前の処女のからだをもつたローラで、そのローラは光の海を眺めながらその海の底に彼女を待ちかまえているにちがいない、やさしい心とたくましい腕をもつた青年の姿を思い描いている、いや、それ以上にそうした青年の胸のところにゆたかな金色の髪の毛を散乱させながらまだ処女のかたきをもつた、しかし、それなりにしなやかなからだ全体をわななかせながらすり寄つて行く自分自身の姿を光の海のきらめきのまんなかにあざやかに描き出していた。黒いスリッパのローラはそういう彼女にくらべるとはるかに年をとつていたが、若いローラに負けずに、いや、ときとしては彼女以上に妖艶に美しい女性で、彼女の細面の顔かたち、アップに結い上げた黒い髪の毛、その下のほっそりとしたうなじは本来のスリッパの持ち主であるおかまの母親とよく似ていた。もう五十歳近いというのに決して三十五歳以上には見えない（と母親のとりまきの男性たちのひとりが彼女に耳打ちするように言ったのを、おかまは耳にしたことがあった）、それでいてその

年齢相応のゆたかな階層の女性特有の自信と貫禄にみちた豊満なからだを、スリッパをそのままパティーでのロングドレスのように見せる優雅な身のこなしで動かしながら（おかまはときどき彼女のそんな姿態にお目にかかることがあった。それは自分の母親ながらハッと目をさまさせるような美しさにみちていて、おかまはそんなときまるで美しい年上の女性を一種羨望と妬ましきのこもつた眼で見るまじうら若い女性の眼で見ていた）そばに来た彼女と同年輩の中年紳士にほほ笑んでみせる。おかまの母親がことにきれいなのは肩をむき出しに見せるドレスを着たときのその肩の線で、いくぶん怒りぎみの肩がしつとりといちめんに脂ののつたような肌のなめらかさと抜けるような白さとの二つの相乗作用で、誰でもそこにちよつと手を触れたくなる——実際、おかまはいつだったか準備万端なつていよいよ外に出て行こうとして軽いミンクのコートを羽織ろうとする寸前に（そのコートはおかまも母親の留守のあいだに着てみたことがあった。頭にはこれも母親のものである同じミンクの帽子をまぶかにかぶるとおかまの長い髪の毛のはしが帽子の外に垂れ下るように出て、おかまの顔も母親に似て細面で、首ももともと女の子のように細く長かったからそんなかつこうで母親がよくするように小首をちよつとかしげながら母親の部屋の大きな姿見のまえに立っていると、おかまはまったく女だった。いや、彼女こそ女のなかの女だといつのころからかそういう古風なことばを使つていつも母親のことを考えているおかまの気持ちにそくして言えば、おかまはそこでまったく母親になつていた）おかまは軽くそのすべすべした、人間の肩というよりは何か弾力性をもつた物体のように見えた肌を手を触れたことがあった。彼をおどろかせたのはとたんに彼女が肩を痙攣させるようにびくつかせてそのままのけぞるようにしてうしろをふり返つたことで、そのときのコメカミのあたりに苦痛にたえ

かねるように奇妙にシワをよせた、それでいていつも澄まし込んでいる母親からは想像もできないような両唇を無防備に開いてご自慢の白い小さな歯ならびをくつきりと見せた顔は自分に慕い寄つて来る男のすべてをむさぼりとろうとする、これまでにおかまが一度も見たことがない女の顔だった。母親の好きなエステイ・ローダーの暗い赤色の口紅が上下に今にもその両端からヨダレでもたれ下つて来るような弛緩した感じで開いた上下二つの唇に光つていて、そのいつまでもおかまの網膜の底に残るイメージを追いつめるようにして、おかまは母親の留守ちゆう彼女の寝室に入ると内側から鍵をかけて、口紅やらお白粉やら化粧水やらおかまにはどれがどれだか区別できないままにいくつも並んだ三面鏡のまえに坐つて彼女のエステイ・ローダーをつけた。母親のやつているようにあらかたスティックでつけ終つたあとでさらに小さい刷毛でいねいに輪郭を描く。いや、それからさらに舌をちよつと出して舌なめずりをするようにして唇をなめてから、いつもの彼のものとは似ても似つかぬものとなつたいくぶん暗い感じのする真紅の両唇をそこになるべく力をこめないようにして開く。そうするとたちまち立ちあらわれて来るのはたしかにそのときの母親の表情で、そのうつとりとこちらを眺めて来る五十歳近い、しかし、三十五歳以上には決して見えない細面の美しい女性にむかつて、「おい、美智子」と彼は呼びかけていた。

もちろん、それは心のなかでの呼びかけだったが、それは彼がしょっちゅう家で耳にしている父親の「おい、美智子」ではなかつた。父親の声は彼に似ていくぶんかんだかい気味の声だったが、その声はもつと低めの重々しいひびきをもつた、それだけ男性的なものに耳に聞こえて来る声で、その声を一度きりだったが、彼はたしかに現実には聞いていた。それはもう三月まえのことになる、おかまが

学校から帰って来ていつものように玄関からすぐとつぎのところにある階段を上って三階の屋根裏の自分の部屋に上って行こうとすると、横手の客間の閉じられた扉のむこうで話し声としてのび笑いをするのが聞こえて来て、話し声は男の声——低い、しかし、よく透る、一種のひびきをもった声で、しのび笑いはたしかに逆に人一倍高い声の持ち主の母親のものでしたが、彼が聞き耳をたてるようにして一瞬立ち止まったのは、やはり、そこに本能の動きのようなものがあつたからだろうか、立ち止まったその瞬間に聞こえて来たその声は「おい、美智子」だった。

ローラ——五十歳近い、しかも決して三十五歳以上には見えないからだの美しさとしなやかさをもったローラになったおかまがベッドの上で黒いスリッパ一枚になりながらいつも追い求めているのは、その「おい、美智子」の声の主だった。現実の生活のなかでもおかまはその声の主を追い求めている、家に来る、あるいは母親の店に来る男の客、知人、友人の姿をあれこれ思い浮かべてみているのだが、これまでのところその探索は成功していなくて、声の主はあくまで声の主だった。それでも「おい、美智子」というあのことば使いと低い落ちついた声の調子から声の主が決して純白のスリッパを着た若いローラがその胸に身を投げかける若い世代の紳士ではないことには判断がついていて、彼はどうあつても母親と同年輩の中年かそれともさらにもう少し年上の初老の紳士だった。ベッドの上の黒いスリッパを着たおかま——いや、ローラにその紳士は寄つて来てときには年相応に落ちついた身のこなしで、ときには純白のスリッパのローラの相手よりもさらにただけしくも若くもある動作で彼女を抱きすくめるようにして抱いて、それから彼のやさしげな手の動きが首と言わず腕と言わず彼女のなめらかなからだの表面をなめまわすようにして動いて行くのだが、スリッパの吊り紐をその手

の動きが肩にずらして外そうとするところで、ローラは「ね、お願い、外さないで」と彼の耳もとに口を寄せながら渾身の力で手の動きを止めようとする。そのまま「恥ずかしいの」と彼女は泣き叫ぶようにして嗚咽に似た叫びをあげるのだが、それは、もちろん、その黒いスリップの胸にかくされた乳房を見せるのを恥ずかしがっているのではなかった。いや、それは、やはり、恥ずかしがっていると言うべきことなのかも知れないのだが、彼女が恥ずかしがっているのはそこに乳房があることではなくて、スリップの上からでは彼女が下着メーカーの知人にたのんで特別につくらせた（あれが「おい、美智子」の声の主ではなかったのか！）装着しているのが判らないほど薄く仕上げたブラジャーの右の乳房にはパッドがいつぱいにつまっついていて、つまり、そこにはあるべきほんものの乳房はなかったことだった。

一一

母親が乳ガンの手術を受けて右の乳房を根もとのところから失なってしまうてからもう三年が経っていた。そのときにはお、かま、はまだ中学生で、母親が乳ガンの手術で入院すると母親自身の口から聞かされたとき、彼はほんとうに母親がそれつきりで死んでしまうのではないかとひどくおびえたのだが、蒼ざめて唇をふるわせている彼にむかつて母親はかえって慰め顔で「紀彦ちゃん、わたしのはガンでもお乳のところに来たガンだから大丈夫、死にはしないわ、わるいところだけ取つてしまえばよいのよ。紀彦ちゃん、あなたは何も心配することないのよ」と言った。もつともあれはあれで自分で自分を元気づけていたのかも知れない。母親も慰め顔でそんなふうと言っているうちに彼女

のきれいに口紅をぬった唇もいつのまにかワナワナとふるえ始めていた。

手術が行なわれたのは、おかまの家からちようど直下に貯水池をへだてて見下すことになる、新幹線の駅からほど遠くないところにある市立病院で、その陰気でひねこびたように小さな三階建ての建物は決して母親の手術にふさわしい場所のようにおかまには思われなかったが、父親の話ではそこには港都一と言われる乳ガンの手術の名手がいるということだった。四十代半ばの京大出身の医者だったが、「むつかしい手術はな、あんまり年をとった院長クラスの医者がやるよりも中堅どころのそのくらの年のがアブラののりきったところでいちばんいいんやで」と父親はそのころしきりに母親にも言えば、おかま、またち三人のきょうだいにも少しばかり弁解がましく言っていた。その父親のことばにおかまより五歳年上の、一年浪人したあげくによくこのあたりの裕福な家庭の子女を専門に収容すると言われる私立大学に入った兄の健彦が「つまり、これで確実にママのボーイ・フレンドの数がひとり増えたわけですな」と応じたのは、そんなふうにならぬことに母親の沈んだ気持ちをひきたてるつもりがたしかにあつたにちがいないが、同時に、やはり、あれはあれで健彦は父にいやがらせを言っていたのだろう。母親は父親の三人目の妻で、二十歳ほど年がちがったから、数年ほどまえまでは港都の会社の経営者仲間のあいだできつての「オールド・プレイ・ボーイ」として鳴らした父もこのごろはさすがに老いとおとろえを見せていて、その点で派手なのは、すくなくともそんなふうに見てとれるのは母親のほうだった。もつとも母親に言わせるとわざとそう見せかけているということになるのだろう、彼女のところには中年、老年、いや、ときにはおかまの姉の早苗が結婚したばかりの相手の信二郎と同じ三十歳過ぎの年齢の舶来一流品の展示会のようにして身なりをととのえ

て来る若紳士はおろか健彦とほとんど変らぬジーパン姿の若者までが、これも健彦が言い出したのかそれとも案外自分で言ったのかも知れない。「美智子詣で」にやって来ていて、そういう男たちのことを母は誰かまわず「ボーイ・フレンド」というふうに自分から言っていた。「ママのボーイ・フレンド」の誰それがどうしたとかこうしたとかというぐあいだ。あるいは、母親ほどには美貌とスタイルに恵まれていないといつもやつかみ半分にグチをこぼしている早苗が「ママ、今日、えらいハンサムな背の高い男の人と『サン・ジェルマン』にいたやないの」と父親のままで皮肉と羨望をこめて言い出すのをさえぎって「ああ、あの人ね、ママの新しいボーイ・フレンド。生地問屋の息子さん。パパかつて知っていはるわね、ほら、あの木山さんの息子さんの……商工会議所のグルルでパパが紹介して下さった……」と母親はにこやかに微笑をふりまきながら少しもわるびれることなく言つてのける。

もつとも母親には「ボーイ・フレンド」も数多くいたが、女の友達、知人、とりまきも数多くいて、そちらは母親に言わせると「ガール・フレンド」だった。それから、もちろん、母親の経営するブティックに勤める店員も母親はときには気まぐれに「こちら、うちのヤングのガール・フレンド」というふうに客に紹介したりしたが、そこはそういうことについては人一倍ケジメをつける母親のことだ、彼女たちのほうで母親のことば通りに友達づきあいを始めたつもりになって慣れ慣れしくやり出すと、つい二月まえにも追い出された笹木君子のように母親は容赦なくクビにした。「ママはね、あんなに愛想ようしてはるけどほんまはこわい人なんやで」と笹木君子に泣き込まれた早苗はそのころ口癖のように言っていたが、母親の耳に早苗のそうしたことばはいち早く達したのだろう、母親がいつになくきびしい顔で「紀彦ちゃん、ビジネスの道はきびしいんやで」と突然テレビ・ドラマのセリ

フのようなことを言い出して、おかまをおどろかせた。

そのときにはロング・ドレス姿の母親のあらわになった肩におかまが手をかけて彼女がふりむいたときの無防備に開いた両唇は堅く閉じられていて、たとえそこに彼女がもつとも親しくしている「ボーイ・フレンド」のひとりが不用意に唇を近づけて行こうとも冷たい拒否をくらののが関の山だった。「ビジネスはビジネス。恋とビジネスは別」とその唇なら言つてのけるのにちがいがなかった。いや、母親はそのとき、そこでは親子のあいだでさえ別だと言いたかったのかも知れない。「ねえ、あなた、そうでしょう」と母親が父親をふり返つたのは、父親が母親を妻にしたのは母親が父親の会社に入つて、父親の秘書をしていたなかでのことだったから、そこで特別のつながりを感じているのかも知れなかった。今はバラバラになつてしまつた二人はすくなくとも過去には「ビジネス」のパートナーアだったのだ。いや、今でも母親の店は父親の経営する小さな貿易会社からごく一部ではあつたがヨーロッパ製の生地や製品を輸入していたから、今もつて「ビジネス」のパートナーアではあつた。ただ、過去は知らず、今はあくまで彼女が主導権をにぎるかたちでのパートナーアであることは事実で、港都を一望のもとに見下す古風な洋館を手に入れたのは父親の才覚というものだったが、それを今維持しているのは母親だと言えないこともなかった。一家の生活費を見ているのが母親だというほど父親は落ちぶれて来ているのではなかったが、たとえば、見かけは前時代の洋館のなかをきれいに現代風に改築したり、そこに新式の冷房の設備をとりつけたりするのはもっぱら母親の役割で、母親はいつもそういう自分の役割を子供たちにむかつて自慢していた。無邪気で子供っぽい自慢のしぶりで憎めなかつたが、あたかもそこで彼女がただひたすらに夫にとりすがつて生きている他の夫人たちとちがつ

て、彼女は自由で、独立していて「ボーイ・フレンド」たちをあまはべらすのを許されていると主張している感じもなかった。「紀彦ちゃん、自分でごはん食べられないで女性の解放やら自立やらいうてはる人いるでしょう、あんなのもわたしの店にも来はつて、けっこうご主人やら恋人さんやらにおねだりして高い服買うてもろうてはるのよ。わたし面白うてしようない」と彼女はよくお、かまに言っていたが、たしかに母親は「自分でごはん食べられる」、それも盛大に食べられる女だった。早苗がいつか笑っていた。「うちのママ、理屈言いはらへんけど、理屈を黙つてやつてはるねん。」しかもそれを自分の利益になるやり方でやつているじゃないかと、これはお、かまの思いだった。

美しくて、しかもやり手で、このところ「異人館通り」の名でめきめきと観光地として売り出して来たいくつかお、かまの家同様の古風な洋館の立ち並ぶ一角に、その洋館のひとつ全体を高級婦人服のブティックにしてその経営者におさまつて、そのブティックは今や東京にも名前のひびくものとなつて高名な女優や作家の夫人がわざわざやつて来たりするものになつていると言えば、もうそれだけで母親はこのごろの若い女性のあこがれの対象となつてふしぎはなかつた。母親のことがそういう若い女性むきの雑誌にその「ラ・メゾン・ド・ビッシュ」というブティックの紹介とともに記事になつてからは、若い女性がお店の商品（の大半は独身で気ままな会社勤め、したがつて月給もボーナスも自分の思う通りに費える、そういう記事を見ると気軽に新幹線に乗つて東京からやつて来るといふ彼女たちも二の足を踏むほど高価な品物が多かった）そつちのけで母親をいわば「見物」に来て、「こんなやつたら商売上つたりやで」とこのごろ母親は悲鳴を上げていた。そういう女性のなかには母親のところへ「弟子」入りを志願する勇敢なまでがいて、店員にしてくれとたのみ込んだりするらし

いのだが、「ビジネスはビジネス」の考え方の母親のことだ、そんなふうな「弟子」入り志願の女の子を雇ったりするような愚行をすることは決してなかった。

そういう子供のときから甘やかされて、すべては自分の思惑次第でどうにでも動くと思っている当世風の苦勞知らずの女の子は母親の事業の結果のすばらしさだけ見て、彼女がそこまで来るためにはどのような苦勞をしなければならなかったのかをまったく考えようとしない——母親はいつもそんなふうにごぼしていたが、NHKのテレビ・ドラマにそのあたりのことがとり上げられてにわかには「異人館」見物がはやり出す以前には、街の中心からかなり離れたところにある上にそこまで行くには急な坂を上って行かなければならない「ラ・メゾン・ド・ピツシュ」のある通りにまで足を運ぶのはよほどのもの好きしかいなかった。今は「異人館通り」ということになってひっきりなしに観光客が通って行くが以前にはほんとうに人影もまばらだったそんな通りに店を出す決心をしたのは、彼女が古風な木造の洋館もあればカトリック教会の高い尖塔もあるといういかにも日本離れのしたそのあたりの街のたたずまいがまえまえから気に入っていたこともあったが、何よりもその大きな木造二階建ての洋館が彼女の好みにピッタリと合うものだったからだ。全体を急傾斜にまとも上げてどうかすると西洋のちっぽけなお城とも見える住居のほうの洋館とちがってこちらは左右に平べったくひろがる落ちつきのある洋館で、半ば剝げ落ちてはいたが薄い黄色のペンキぬりの板を重ね合わせた板壁の上のミドリの屋根は見えているだけでなかへ入りたくなくなる感じのものであった。そこへもって来てこの洋館は裏側の横手の坂をいちだん降りたところから石の階段で入るようになっていて、入ったところがまづ中庭で（今はよく手入れされた藤棚の下に白い卓子と椅子を並べてそこでお茶をのめるようになって

ているが、当時は雑草が生い茂ったただの空間だった。もつともそういう手入れのなさを母親が好んでいなかったというのでもなくて、今でもときどき藤棚の下の白い卓子の椅子のひとつに坐りながら、これも母親がそこを借りるようになってからつくった花壇のひとときわ匂いの強いチンチョウゲの薄桃色の花を見ながら「これ、もとのほうがよかつたかしら」とおかまや店員に言ってみたりした。三月、四月はチンチョウゲ、チンチョウゲが終ると五月には藤棚の藤、六月、七月には港都のシンボル・フラワーだというあじさい、八月真夏には木槿……というぐあいに真冬の寒椿に至るまで中庭には花がたえることがないというのが母親の計画で、その計画通りに花は咲いて、それだけでも母親の店はそのあたりの名所になっていた)、その中庭をコの字型に取り囲んで洋館は立っていた。二階には中庭を見下すようにして回廊状にベランダがついていて、この洋館を明治の中期に建てたというイギリス人の貿易商は、こういう植民地風の家のたたずまいを日本にはるばると到達するまえに彼が渡り歩いて来たマレーシアやシンガポールあたりの彼らの住居から学びとつたのにちがいない。中庭の椅子に坐つて二階のベランダあたりをぼんやり眺めていると、ほんとうに今にも白いヘルメットをかぶつて黒い肌色をもつた召使を連れたいギリス人の植民者がそこから降りて来るような感じがした。実際、いつだったか、昔のマレーシアだかシンガポールだかが出て来るイギリス映画をいつしよに見ているあいだに、母親とおかまが期せずして叫びをあげたのはそういう家のひとつが大写しになったときで、二人とも同じことを叫んでいた。「うちのお店みたい。」

高級婦人服の仕立てと販売の「オートクチュール」の店を出したいというのは母親の長年の夢だったが、その彼女の夢はお店に「弟子」志願にやつて来る若い女性たちのように突然思いついた上つ調

子の夢ではなかった。子供のときから彼女の口癖の表現を借りれば戦後の港都の焼跡と瓦礫のなかではまったく荒唐無稽としか言いようのなかったその夢を持ち始めて、実際に彼女は高校生のときから夜学の学校に通って洋裁のデザインと仕立てを学び始めたのだが、その学校というのもそのころ巷にいくらでも雨後のタケノコのごとくできた洋裁学校とはちがつて戦前からの長い伝統をもつ「中島ドレスメイカー女学院」で、彼女はそこに当時たいへんな難関だと言われた入学試験を受けて入ったのだ。夜学のコースではあったがその学校で彼女は懸命に勉強しておしまいは関西のその世界での重鎮と自他ともにゆるす学院院长の中島みゆきの直接の指導を受けるまでになったのだが、母親はただ学校だけに行っていたのではなかった。学校の行き帰りにそのころ目抜きの大通りに店を出した中国人のスーツ専門のテイラーのシヨウ・ウインドウのまえで立ちどまって毎日見ているうちに主人の陳啓明と知り合いになった。あまり毎日見に来るので陳のほうで興味をもつて彼女を店のなかに呼び寄せたのだが、将来洋裁で身を立ててゆくゆくは「オートクチュール」の店を出したいという遠大な夢をまだ高校三年生だった彼女の口から聞いた彼は少女の夢をわらいもせず聞いて、そういう道で身を立てるためにはまず生地の見分けができるようになるのがかんじんで、それにはできるかぎりいい生地に手を触れてその手ざわりをおぼえておくことだと彼女に言つて、それから何度も店のなかに呼び寄せては、母親の言い方で言うといい生地にさわらせてくれた。陳は中国人で、外国人の特権を使つてそのころでも香港へ自由に行き来して闇で生地を手に入れていたから、そのころの日本になかったようないい生地にさわることができて、これが今も彼女の無形の財産になつているのだと店員や注文の洋服の仕立てをたのむお針子の女性たちに母親は言つてきかせるようにくり返して言つた。

その「オートクレーチュール」の夢がいったん立ち消えになったのは、そのあたりは母親は話をいつもぼやかしておかまにははつきりしないのだが、彼女の恋愛、結婚、そして、離婚があつて、そのあと父親の会社に入つて父親の秘書を勤めているうちに父親に求められて、いや、母親の言い方にしたがえば、父親に強制されて父親と再婚するというようなことがあつて——あとは、「紀彦ちゃん、あなた方を育てて来たのよ」母親の話はいつでもそのことばになつて終つた。

「オートクレーチュール」の夢はその洋館を見つけたときによみがえつて来たというのだ。もう子供たちも大きくなつていちばん下の紀彦が中学生、いちばん上の娘の早苗が女子大の三年生にもなつてどうやら未来の夫となるらしい青年と交際中ということになつていけば、ふんぎりもつく。それは今から四年前のことだが、いったん決心すると母親の動きは早いし、またゆらぎがない。資金はちようどまたまた父親が浮気事件を起こした矢先だったのでまず離婚を迫つて、それだけの慰謝料を払えばいいとあげるといふ条件でつくつたというのが早苗がおかまに教えてくれた話だったが、おかまはその姉のもつともらしいが、どこかみみちいところのある話よりは、何人か自分に言い寄つて来た港都の有名無名の金持たちからまき上げてつくつたのがこの店の開店資金だという兄の健彦の話を信じたい気持ちになつていた。こちらのほうがさっぱりしていて母親らしい話だった。家主はボストンに住むアメリカ合州国人ミセス・ローズという七十何歳かの未亡人だったが、手堅い商いあきなをするというのが評判の老女からそのかなりな大きさの洋館を安く借り受けられたのは、さきにそこを借りて卓子とかシャンデリアとかの室内装飾の物品を売つていた男がそこで商売に行きづまつてあとの借り手を探していた矢先だったからだつた。そこらあたり「ママはほんとうに運の強い人よ」ということに早苗

の意見ではなるのだが、そんなことを母親の前で言い出せば、母親は母親で、自分の魅力のおかげだとも気まぐれな信心のおかげだとも、そのときどきの気分にしたがつて言いはるのにちがいがなかった。魅力はともかく信心のほうは自分の乳ガンにつけ加えて健彦が自動車事故で半年入院するというような事件がひきつづいて起こって、彼女は知人にすすめられるままに新幹線の駅近くの山あいに入ったところにある祠ほこらに日参して拝み出してからの話だ。ただ、何ごとにもせよやり出したとなると徹底する彼女のことで、手術で入院していたあいだときどきのヨーロッパ行の期間を除けば、たとえ時刻は朝がたであったり午後になつたりはしても彼女は一日たりともお詣りを欠かしたことはなかった。いざ、その洋館を借りようとしていろいろ調べ出すと、室内装飾の店の男のまえに借りていた西洋家具屋がそこで事業に行きづまって自殺する、いや、さらにそのまえ、これは何んの商売をそこでしていたのか判らないが借りていた人物は自動車事故で死ぬ——というようなことが洋館の借り手の歴史にはまわりついていて、母親は知り合いの占い師のところにもまで相談に行つたというのだが、占い師は、あなたはなかなかの信心家だし、聞くところによるとミセス・ローズも熱心なキリスト教信者だということだ、たとえ二人の信心する神様はちがつても信心ということで同じだから、二人の相性はピッタリ合っている、ためらわずに借りなさい、占い師は確信をこめて言つたので借りる気になつた。そのとき、占い師はさらにことを継いでとにかく二年辛抱しなさい、二年経つと運が大きく開けると母親に告げたのだが、鳴かず飛ばずの二年が過ぎたあと、NHKのテレビ・ドラマのおかげでそれまで打ち棄てられた感じになつていたその一角にわかには「異人館ブーム」がまき起こつて、「ラ・メーゾン・ド・ビッシユ」のあるさびれて夜ともなれば売笑婦や女装の男がチラホラと立つて

いた通りはまたたくまに観光の中心になって、ブティックやレストランや喫茶店がたちならぶようになった。「異人館ブーム」が起こり始めるとすぐ母親がしたのは、そこらは母親の機敏な商才のきくところだが、それまで二階の半分だけを借りて店にしていたのを思い切つて一階、二階全部を借りた上に、ただの雑草園の空間だった中庭に藤棚をつくり花壇をしつらえ、そこに白い卓子と白い椅子の喫茶部を開業することだった。店員もはじめはたった四人だったのを一挙に二十五人に増やして、二階はもと通り婦人服の仕立て、販売のセクションだったが、一階は四部屋あったのをそれぞれ「帽子の部屋」、「アクセサリイの部屋」、「下着とストッキングの部屋」、それからそれこそ母親愛用のエスティ・ローダーの口紅やらファンデーションやら、あるいは、フランス製のさまざまな香水やらを並べた「化粧の部屋」というぐあいに分けて、母親に言わせると、この洋館をひとめぐりするだけで女性はまだ着ていたもの、まわりついていたものすべてを脱ぎ棄て、まったく新しいものを着から身につけることで身心ともによみがえられるはずであった。

「紀彦ちゃん、わたしが男やつたらね、恋人つくつたらわたしの店に連れて来て、まず着ていたものを全部棄てさせる。あのね、駅に行ったら、青少年に悪い雑誌を棄てましょうというてどこかのおせつかいなおばあちゃんがつくつた白い箱がパツクリ口を開いて待ってますやろ、あそこに下着まで脱がせてみんなほうり込ませる。それからうちの店一階の『下着とストッキングの部屋』から順ぐりにまわつて、おしまいには二階のはしつこのほうにはコートまでおいてますやろ、下には帽子もあるしで、あれですべて終了、みんな新らしいものになる。女はな、紀彦ちゃん、おぼえておき、身につけるものでいつぺんにちごうた新しい人間になれるんやな。男がそれに全部つきおうて、自分に好きなもの、

女にこうあつて欲しいと願うスタイルのものを選んで着せて行くことで自分好みの女にする。これが男の才覚いうもんやな。女はな、女で、そんなことされるのを待つてますのや。」

母親はよくそんなことをおかまに言つたが、母親によると、日本の男性は奥さんや恋人やガール・フレンドに連れられて店に来て、はなやかな色彩の色とりどりのものにとりまかれた店のなかに入つて来るだけで恥ずかしくなつてしまうのか、わざと渋面をつくりながら部屋の片隅でやたらにタバコを吹かしたりしてはた迷惑なことになるのだが、そこへ行くと西洋人の男性はわるびれずに奥さん、恋人、ガール・フレンドのそばにつきつきりでああでもない、こうでもないと品定めをする。いや、ときには連れて来た彼女をそちのけにして母親とばかり話してあげくのはてにこれにしないかと命じたりして、彼女を怒らせたりする。そういう西洋人の男性の態度は「下着とストッキングの部屋」でも変りはなくて、女性でも手にとるのが恥ずかしいような派手な下着を手にとつて、「おまえ、これが似合うよ」と言つたりするのがいて、ときには店員のほうが眼のやり場に困つたりする。そんなときでも気持がよいのは彼らはへんに照れたりせず堂々としていて、「紀彦ちゃん、男はね、いつでも堂々としてんとあかん。そこが男の魅力というものよ」と母親はこれもよく言つた。おかまは母親のそのことばにいつも「フンフン」と無関心をよそおつて気のない相槌をうつていたが、ことさらに無表情にそうするのは、いつも母親の店に行くたびにかえつて足早にすり抜けるようにして通つて行く、しかし、眼は忙しく動いてそこにあるもの、これ見よがしにおかれてあるもの、見るだけだからだが火照つて来るように派手に色彩をまぎ散らしながらかけられているものすべてを一瞬のうちにとらえているその「部屋」のさまがからだの底から微妙に突き上げて来る快感とともに意識に

立ちあらわれて来るからで、「部屋」の隅の試着室のなかで今純白のスリップ一枚をからだにつけてふるえている、そんなふうにかほそい、心細い感じているのは、それは、やはり、ローラだった。

「ほんとうはね、わたし、あのお店な、『女の城』という名前にしたかつたんやけどな。フランス語で言うたら『ル・シャトウ・ド・ファンム』かいな。あんまり激しすぎる感じがしたんでやめて今の名前にしたんやけど、紀彦ちゃん、今のお店の『ラ・メーゾン・ド・ビッシュ』の意味判る？ 『メーゾン』の意味は判るやろ、家や。いや、家というより館やかたやな、つまり。……それから『ビッシュ』というのな、フランス語で牝鹿ということやな。それも若い女の人のことを言うのよ。つまり、二つまとめて言うと、『女の館』。ね、紀彦ちゃん、ここは『女の館』なんよ。」

母親はよく「下着とストッキングの部屋」での西洋人の男性のわるびれない態度の話をしたあとでそんなふうなことを話の結びのようにして言ったが、おかまが顔を赤らめながらその母親のことばに慌ててうなずくのは、それだけ自分が「女の館」の住人のような気がしていたからだろう。彼はもう紀彦ではなくてローラになっていて、そのローラは「ビッシュ」と呼ばれるようなしなやかで軽やかな、そして、かほそくたよりなげな姿態をもった若い女性だったが、おかまはすでに仏和辞典で、フランス人の男が女を「ねえ、おまえ」と呼ぶときには「マ・ビッシュ」と言ったりすることも、あるいは、十九世紀末には「妾」のことをそんなふう呼んだことも知っていて、たぶん、そのローラは母親が「ボーイ・フレンド」にしているような財力もあればからだつきもゆつたりと大きい中年、初老の男が囲っている若い妾だった。そう思うとおかまはまるで自分のからだだがんじがらめに縛られているような、そして、そこでからだか自分の意志に反して異常に快感を感じているような錯倒した

感覚をもったが、その若い妾ローラにむかつて男は低い声でいつでも呼びかけていた。マ・ビツシュ。「ねえ、おまえ。」そして、その声はあきらかにあの「おい、美智子」と母親を呼んだ声に重なっている。

三

父親はよくうなざれていた。

父親のいびきがうるさいという口実で（年とつてから父親のいびきは激しくなつて来た）と母親は子供たち三人の同意を求めようにしよつちゆうこぼしていた。それと、歯ぎしり。それから、うなざれる。母親は父親をこの「異人館」ではもとは書齋に使われていたらしい、しかし本をろくすつば読まないしもたない父親は長年事務室として使つて来た廊下のいつとう奥の部屋にベッドを入れさせて送り込んで自分は大きなダブルベッドのあるもとの夫婦の寝室で寝ていたが、それでも父親のうなざれ方がひどいときどき父親のベッドのそばまで行つては彼をゆり起した。三階の「屋根裏」に寝ているおかまは母親の話に聞いているだけで実際にはそのさまを見たことはなかったが、母親の話では、母親がそんなふうにしてゆり起こして眼覚めさせたあと「どうしはつたん、いつたい。何も心配することあらしませんよつて安心して眠りなはれ」と母親のような口をきくと、父親はウンウンとそれこそまるで幼児に立ちかえつたようにあどけない表情でうなずいてそのままやすらかな寝息をたてて眠り込んでしまうというのだ。たしかに父親のうなざれ方はひどくて、三階のおかまの部屋にまでは聞こえて来なかつたが二階に眠る早苗夫妻や健彦のところには断末魔の息のような父親の声はひびいて来るといふのだが、「何んでパパはあんなにうなざれるねん」というおかまのいつかの当然の

質問には、母親は「パパはね、さんざんわるいことして来はってん。それで人のうらみがこもってあんなにうなされはりますのや」と素気ない口のきき方で答えた。あまりその口のきき方が冷たいものに耳にひびいたので、おかまは「わるいことしはつたよってパパは金が儲かって、ぼくら、こんな家に住んでいられるんとかうか」と生意気にことばを返したが、母親は「わたしはお金儲けのことばかり言うているんやないの」とこわい顔で、おかまをにらみつけた。おかげで、おかまは「ママのあのお店かつて、パパのおかげで始められたんやないか」というとつておきのことばを言いそびれてしまったのだが、べつにそのことばで父親に同情しているつもりも母親にこのごろ冷たくあしらわれている自分の祖父ほどに年老いた父親をかわいそうに思っているつもりもなかった。おかま自身をふくめて子供たち三人はおそらく母親以上に父親に対して冷淡で、早苗などは「かつての輝けるプレイ・ボーイも年とつてカタなし。ただの薄汚いおじいちゃんよ、まったく」というような口のきき方をして新婚の夫の信二郎にたしなめられたりして、父親がたまさかみんなで夕食を食べに行こうと言い出しても母親よりさきに三人の子供が何んのかの理由をつけて父親の提案をつぶした。

早苗の無遠慮なことばではないが、ほんとうにこのごろ父親は年をとつて来ていた。だいたい小柄な上に脚が短かくて胴が長いという典型的な日本人スタイルで見ばえはよくなかったが、それでも昔はちぎれそうに力がからだにこもっていて、それが父親の魅力をかたちづくっていた。母親が父親に見せめられたのはまさにその力が父親のからだにいっぱいにみなぎっていた四十代の半ばのころで、まだ二十代半ばの母親にとつてもそういう活気にみちた中年男の父親は、母親は自分では極力否定するのだが魅力でないこともなかったにちがいない。父親はそのころ朝鮮戦争で一かバチかの大賭けの

大金儲けをやったあと事業をいろんな分野に着々と拡大して行っていたときで、考えてみると、父親のそのころはまさにこわいものなしの上り坂の極だったのだろう。「豆タンク」とアダ名された、小さくて横にひろいがつしりしたからだであるごと遮二無二運命の扉にぶつかって押しひろげて行く父親の姿は、落ちぶれた中流の良家の令嬢だった母親の心に二十何歳という年齢のちがいを踏みこえさせる何ものかをあたえたのにちがひなかった。ときどき母親もあのころの父親の魅力について語ることもあつて、そんなときには今彼女のまわりに集まつて来る大、中、小さまぎまの「ボーイ・フレンド」のウゾウムゾウの誰よりも魅力的だったとほめことを惜しまなかった。「だから、わたしもうちのおじいちゃんにひかれたのよ」と母親は言い、一瞬そのころの彼女に立ち戻つたようにうっとりした表情になった。早苗にはまだ子供が生まれるけはいはなかつたが、早苗が結婚するとすぐ母親は「パパ」から「おじいちゃん」に父親の呼び名を切り替えていた。父親もさからわずにそう呼ばれると返事をして、いつのまにか子供たち三人も「おじいちゃん」と呼び始めていた。もつとも、父親の先妻二人にはそれぞれ子供が二人あていて、たしかそのうち二人の子供の家庭で孫も何人かできているはずだったから、父親も「おじいちゃん」と呼ばれてもふしぎはなかつたが、お、か、ま、の家庭でそう呼び出すのと同時に父親は何か愕然と年をとつてほんとうにおじいちゃんおじいちゃんじみて見えるようになった。それも薄汚いおじいちゃん——薄汚いことにおいてありふれたただのおじいちゃんだ。

父親は港都の近郊の農家の出だったが、戦争にはニューギニアの前線にまで駆り出されて行つたのが九死に一生を得て復員して来ると（なんでも千何百人いた同じ部隊にいた兵隊がおしまいは二十何人になつていたというのだ。それも大半が餓死した。「うちのおじいちゃん、ひよつとすると

人間でも食べはったんでうなされはるのんとちがう」とときどき早苗は無遠慮なことを言った。「そうやったとしたら、あんた、どうしはるんです」と母親はこれも無遠慮な口調で彼女に言った、港都に出て来て働いた。と言つても母親の言うように焼跡と瓦礫の街だったそのころの港都のことだ、仕事があると言つても闇市で当時羽ぶりをきかせていた中国人や朝鮮人の闇市商人の下働きをするくらいのこと、国鉄の駅あたりが大きくひろがった闇市で一年懸命に働いたようだった。そのうちようやく貯め込んだ小額の資本をもとに雑穀類を入れる麻袋の製造販売の会社をほそぼそと始めたところに朝鮮戦争が来た。その戦争が彼の大バクチ、大儲けのもととなったのだが、それは朝鮮に出動することになった国連軍が陣地構築のために、あるいは、兵士が匍匐前進するときに使うために大量に麻袋に砂を入れたサンド・バッグを必要としたからだ。この情報を小耳にはさんだ父親は早速店員をひとり連れて上京し、在日アメリカ合州国軍司令部の調達部に乗り込んで、破格の安値と納期は必ず守るという二つの条件をふりかざして係官に食い込んだ。たしか一枚五十円で引き受けようというのだから当時としてもべらぼうな安値でもちろん採算を大きく外れていたが、ただ、受注の数量が問題で、独占契約に成功して一億枚麻袋をつくって売るということになれば結局たいへんな利益になる。原料のジュートも思うにまかせぬ時代だったが、こういうときは何よりも既成事実をつくってしまうことだ。契約さえできれば、とにかく当時の日本の最高の権力者であるアメリカ合州国軍司令部との契約だということになって、どんな無理もきく。それだけの思惑で上京した父親は、あらゆる手段を使ってそのウイリー・スミス少佐という係官を籠絡したのだが（手段のなかには金もあれば女もあった。あるいは、そのころようやく出まわり始めた真珠のネックレス。彼はそれを三本用意した。一

本はデンバーの片田舎にいるスミス少佐の夫人のためだったが、あと二本は東京にいる彼の新、旧それぞれ的情婦のためだった。父親はこの取引のためにすべてを賭けていて、暴力団からの高利の借金もふくめてあらゆるところから資金を借りまくった)、もちろん、同業者からの妨害もあいついで、暴力団を使つての脅迫もあれば、アメリカ合州国軍司令部に殴り込みをかけた同業者までいた。しかし、そんなことにひるむ当時の父親ではなかった。結局、すつたもんだの末に父親はその巨大な契約をほとんど独占に近いかたちでアメリカ合州国軍とのあいだにとり結んだのだが、父親の最初の思惑通り最高権力者との契約という既成事実はどうな難関をも突破させる力をもつていて特別にジューートの輸入許可もとれたし、そのための借金、外貨準備もその契約書の何枚かの紙片によつてできた。

「あのときは、奥さん、すごましたで。とにかくおん大将、一日を三日にして働け、いうて工場に来て陣頭指揮や。」

当時の父親の麻袋会社で専務をしていた山本は、今も父親の経営する小さな貿易商社であいかわらず父親の右腕として働いていて、ときどき家にやつて来て四方山話をして行くのだが、話題のたいいていがあるころの大バクチ、大儲けの時代のことだった。おかも彼のその話のおかげで当時の父親の活躍ぶりを知ることができたのだが、話のおしまいはいつでも「おん大将の一日を三日にして働ける陣頭指揮」の話でなかつたら、一億枚の麻袋納入期日までに間にあわせようと必死になっているときに火災でかんじんの工場が全焼するという一大事件が起こつて(同業者の放火だという説がもつばらだったが、真相はついに解明されなかつた)、これはもう自殺ものやと幹部は蒼くなったが、そこでもおん大将、騒がず、「太閤秀吉は三日で城をつくつたやないか」と全員を叱咤激励、焼跡の片づ

けをしている間も惜しいとばかりに近くに新らしい土地を買い求めてすぐさま新工場の建設にとりかかって、十日あとには二百台のミシンが音をたてて動き出していた……というような話で、話がそこまで行くと、もちろん、日本の結びの文句はきまっていた。「もうあんな戦国時代みたいな時代は二度と来ませんやろな。」そのひと言を言い残すようにして父親より三歳年上だという、しかし、父親より責任少ないところはずっと生きて来たせい、それとも父親のように仕事もしたが遊ぶことにも懸命に精を出して精力をつかいはたしたりしなかったせい、か父親より確実に五歳は若く見られる山本は立ち上って別れを告げる。いや、そのついでに卓子の上に出されて残されたモナカやマンジュウのたぐいをいつもすばやく紙に包んでポケットに入れていた。ときにはその行為を見とがめられたように母親やおかまをちよつと照れたようにして見ながら、もう一度口を開くこともあった。「朝鮮の人にわるいけど、わしらの今日あるのんはほんまにあの戦争のおかげでつせ。そう思うていますんや。」

大バクチ、大儲けのあと、父親は会社の規模をひろげて「木川田エンタープライズ」をつくった。母親はその新会社に社長秘書として入ることになるのだが、そのあたりからは新会社で影の薄くなった山本より社長秘書として事業の中心にいた母親のほうが父親のやったことにくわしかった。まず、手を出したのが戦争のさなかブームがつづいていたゴム製造で、これもかなりの儲けになったが、停戦でゴムの価格が暴落して結局もとのもくあみに近いことになる。次に乗り出したのは住宅建設で、のちに出て来るプレハブ住宅のはしりみたいなることをやってこれはかなり当たった。あとパチンコ屋を私鉄、国鉄のめぼしい駅の駅前につくるわ、貸ビル業にも乗り出すわというようなことをやっていたが、その次大きくあてたのは、やはり、コンテナ船に目をつけていくつかの会社の代理店を買って出

たことだろう。そこにはもうそのころには社長夫人におさまっていた母親の商売の勘が大きいに働いたとおかまの母親は自慢するのだが、たしかに母親にはそんなふうに関敏にちよつとした才覚を働かせるところがあつて、猪突猛進、我武者羅型の父親とは組み合わせはなかなかよくて、「財界オシドリ夫妻」として地元の新聞に書き立てられたこともあつた。

しかし、結局のところ、世の中が平穩無事におさまるにつれて父親のようなやり方での成功者はどうしても世の中の流れについて行けないところがあるにちがいない。せつかく乗り出したコンテナ船の代理店のほうも大手の船会社が本格的に進出して来たところではほんの名前だけのことになつてしまつて、そのあとこれも母親の商売の勘で始めたスーパー・マーケットの経営も時期がまだ早すぎたせいだろうみじめな失敗に終つて、「木川田エンタープライズ」はいつのまにか小ぢんまりとした「木川田商事」に名前まで代えていた。小さな貿易会社に「エンタープライズ」というような名前はいかにもインキくさくて不利だという山本の意見にかつての闘志あふるる「おん大将」も折れたのだが、機を見るに敏な他のもつと有能な幹部が立ち去つたあとで一時は遠くに斥けられていた山本がもう一度「おん大将」の右腕に立ちかえつて来ていた。

そのあたりで父親の老いとおとろえが本格的に始まつたようだった。母親がまたまたの浮気事件を種にゆするようにして「ラ・メーゾン・ド・ビッシュ」の資金を父親に捻出させたのもそのころだが、早苗に言わせると、その浮気はおそらく父親の生涯における最後の浮気だった。「あんな、言うたるか、紀彦ちゃん、もうパパのものな、いうことさかへんようになつてるねん」と当時女子大生だった早苗はおかまの耳に口を押しつけるようにして低い声でささやいたが、まだそのときには彼には姉の

ことばが何を意味するのかはつきりとは判っていないかった。ただ漠然と彼女のことばが彼の心の面積の大半を占め始めた性にかかわることがらであることはとらえられて「うん、うん」とおかまがしたり顔でうなずくと、もうそのころにはまちがいなく処女を失なっていたにちがいないと今のおかまには確信できる姉は、今度の父親の相手は港都のさるバーのママさんだが、父親はたぶん彼女のパトロで、そのバーも彼がお金を出して彼女のものにしてやったバーだったはずだ。かなりの年数のつきあいだったらしいのだが、彼女はとるだけのものをとったあと父親をお払い箱にしたがつているところに幸いにして父親のものもはや役に立たなくなつて来ていることを発見した。「もうパパ、アカンで。奥さんのところへおとなしゅう帰つて盆栽でもいじつてはつたら」というようなことをほんとうに彼女が言ったかどうかは知らないが、姉はそんなふうにおかまの耳に口を押しつけたまま声色を使うようにして言つてからクスクスうれしそうに笑つた。それはほんとうにうれしそうでも愉快げでもある笑い声で、それだけ聞いていると、テレビの人気番組「爆笑人生街道」を彼女が見てひとりで見ているような感じだつた。姉はさらにことばを継いで、父親がそれでもバーのママさんのところから立ち去ろうとしなかつたのでいいかげんうるさくなつた彼女は母親のところへ電話して来て、これも姉の声色によると、「もしもし、木川田社長はんの奥さんですか。うち、バー『ブラン・ドウ・ブラン』のママのミヨ子言いますのですけど、うち、おたくのご主人はんと思はず浮気してしまいましたん。いや、浮気しようと思つたんやけど、ご主人もうでけへんようになつてはりますねん。奥さん、安心しとくれやすな。これつきりうちに手つかずでご主人はん、奥さんのもとへ帰りはりますよつて」と何気なく受話器をとり上げた母親にやにわに言つた。

それで母親が仰天したあげく泣きじゃくったりしたのかというところでなかつた。「うちのママはあんなきれいでやさしい顔してはるけど、きついところがあるんよ」と姉はいつもの口癖のセリフをつづける。母親は恩きせがましく言つて来た「ブラン・ドウ・ブラン」のミヨ子（バーの名前もママさんの名前もほんとうの名前なのかそれとも姉が面白おかしくでつちあげた名前なのか、おかまには判らなかつた。いや、そんなことを言い出せば、この話全体もどこまでほんとうでどこからが姉の創作なのか、よく判らぬところがあつた）に、もううちはそんなものがないこときかなくなつたような役立たずの主人はいりません、あなたにさし上げますから、煮るなり食うなり自由にして下さいと素気なくことばを返したというのだ。「それで、結局、どうなつたの。」おかまが言うと、姉は「何言つてるのよ、パパはちゃんと家に帰つてはるやないの。それからママのお店もうまいことできるといふわけやし」と早口に言つてから、また耳に口をつけて声をひそめた。「ママのお店できたのも、紀彦ちゃんにもついでるけどパパの役に立たんようになったもんのおかげやで。」それから、もちろん、また姉は笑い出す。うれしそうで愉快げな、これほど面白いものがあるかという感じの笑いだ。

男にはそういうことが何よりこたえて、ガツクリとそこで年をとり始めるといふのが早苗がしきりにおかまに教え込もうとしたことだつたが、実際、父親を見ていると、ひところの元気あふれた父親の抜けがらがのろのろと歩いているふうに見えた。髪にもめつきり白いのが目立つて来て、そうなつて来ると昔のことがいやが上にもなつかしくなつて来るのだろうか、父親は「ラ・メーゾン・ド・ビッシュ」と同じ通りのはずれにある高級洋品店「キャンベラ商会」の主人を訪ねては昔話にふけるようになつていた。おかまもそこには俊という彼と同じ年の息子がいて親しくなつていたのでときど

きいつしよに行くのだが、その「キャンベラ商会」の父親同様の小柄なからだつきながら商売柄帽子から靴に至るまで世界の一流銘柄の品物を身につけている主人は、中田という日本人の妻の姓を使っていたが本名は金という濟州島出身の朝鮮人で、父親とは昔闇市で知り合った仲だった。なんでも彼はそのころ闇市で占領軍の残飯で適当にシチューをつくって売りもすればそのあいまに靴みがきもするという生活をしていたというのだが、小金を貯めたところで、彼はケミカル・シューズの製造に乗り出した。そこまではむしろ平凡で、港都ではちよつとした小金の持ち主はゴム靴でなかつたらケミカル・シューズの製造販売に乗り出すというのが日本人、朝鮮人、中国人の別を問わず定石だったが、そのあと中田、いや、金が才覚を見せたのは、ケミカル・シューズはいいかげんに卒業して、輸入品の洋品店を始めたことだった。

「あいつはニセモノのあきないでひと財産つくつた」という根強い噂はたえなかつたが、なるほどはじめは決してニセモノではなかつたが、香港あたりの品物を何倍もの法外な値段で売りさばいたこともあつた。ただそれはあのころの商人なら彼のように闇市上りの人間でなくても老舗の経営者をふくめてたいていがやつていたこととやかく言われる筋合いはない。一度だけだったがおかまは彼がそんなふうになしなしかまだなまりの残る日本語（朝鮮人らしく、やはり、濁音がうまく発音できないいらしかつた。おかまと親しくなつてから、自分には「ハシツジョ」というようなこみいつた発音はどうもできないと言つたりした）で客相手に憤慨している現場に出くわしたことがあるが、いつもは温厚で腰の低い、一見これでもう何代目の主人と言われてもふしぎはない落ちつきのある老舗の経営者の挙動を身につけている金が、そのときだけは相手の客が何を言い出したのか知らないが今にも飛び

かかろうとするかのように全身に力をこめて客に對していた。もちろん、今だつて香港製の格安の家具を並べたりはしている。しかし、それは物がいいからで、自分がそんなふうに確信できたからで、店の商いの中心は、たとえば、スイスのバリーの靴だ、あるいは、イタリアのアルファンコのバッグだ……そんなぐあいに世界の一流中の一流の商品を妥当な値段をつけて売っている。品物が品物だから決して安くはない。しかし、まさに品物が品物だから、買つておいて損はない。……彼にさつきから食つてかかつていたららしいまだ三十そこそこの若い客にむかつてじゅんじゅんと説ききかせるようにして言った。

「あいつは頭のいいやつや」というのがおかまの父親の口癖だった。それに度胸もいい。香港製の安物を使つての商売で資金と洋品店としてのかんりの信用をつくつた上で彼は早速スイスまで飛んで行つたのだが、それはバリーの本社に直接話をつけるためだった。横文字を読むのはおろか自分の名前をサインするのもおぼつかないほどの彼がよく行つたものだと思うが、こういう度胸のよさはアメリカ合州国軍の調達本部にこと語学に関するかぎり同じような状態で乗り込んで行つた父親と似ていないこともない。そして、たしかに眼のつけどころもよかつた。そろそろ日本の経済も「奇蹟の復興」を通り越して繁榮の道に乗り出し始めたころだったから、これから高級品志向が人びとのあいだに生まれるという彼の見込みは正しかつた。現地で雇つた留學生の通訳の奮闘もあつてか（その留學生のちにこの港都の大学の教授になつた）バリーと代理店契約を結ぶことに成功して、そこで高級洋品店「キャンペラ商会」の基礎は固まつたという話だが、「キャンペラ商会」という名はスイスと何んの関係もない。おかまが最初からその話で疑問に感じたことを俊に口に出して言う、「それはな、

うちのオヤジさん、店始めるときに何んぞええ名前ないかと新聞見ていよつてん。そしたら、キャンベラで何か会議があつたとかどうとか、出ていよつてん。それでこれこれ、と思うてつけよつたらしいけど、オヤジさん、ほんま言うたら、キャンベラがオーストラリアの首府やなんてずっと知らんかったらしい」というふうにおかまと同年の、しかし、学校は国際学校のキャナディアン・スクールに通っている少年は説明してくれたが、キャンベラがオーストラリアの首府であることを発見したあと、俊の父親は港都のオーストラリア領事館に出入りして、いつのまにか「日豪協会」の港都の支部の理事におさまってしまうぐらいのぬけめのないことはやってのけていた。

俊には兄が二人いて、二人ともにキャナディアン・スクールを出て、ひとりにはさらに本格的に「国際人」としての修行をするためにスイスのローザンヌで国際学校に入つて、すでにそこを出てアメリカ合州国のどこかの州の大学に行つている、もうひとりとは同じ経歴のあとで東京の大学に入ったがあまりつまらないのですぐやめて、今は「キャンベラ商会」が新しく進出した地下の商店街のなかの支店の経営を父親にまかされている——と言うとそれこそ何様の息子たちの感じになるが、父親はもとは闇商人の朝鮮人だつたし、母親のほうも母親のほうで、昔、金が土方の仕事をしていたころに彼といっしょになつたというだけに、早苗の適切な言い方を借りて言えばまったく見ばえのしない色の浅黒い小さなからだの「ほんまにそこらのオバハン」だつた。三人の息子は母親の籍に入れてしたがって三人とも国籍は日本人になっていたが、夫の金はふつうには中田姓を使いながら、国籍は韓国籍にしていって、そこだけかたくなに変えようとしなかった。「血はどんなことをしてみても変えられませんが」というのが、父親がおかまのいるまえで彼に「あんたも韓国籍のままやったら何かにつけ不

便やろ、ええかげんに日本国籍にしたらどやねん」と言つたときの彼の答がそれだったが、お、か、ま、がふしぎにその彼の答をあざやかにおぼえているのは、三人の息子を無理をして国際学校に入れ、「国際人」のビジネスマンとして育てようとしたのは、朝鮮人の血が入っていると日本ではどうあつても馬鹿にされる、日本の学校に行かせても同じことになる、そんななかで無理して行くよりは「国際人」として生きて行くのがいいと考えたからだ、お、か、ま、がこれまでに一度も考えたことがないような話を突然彼が言い出したからだ。いや、金はもうひとつ、朝鮮人のほうは朝鮮人のほうで日本人の血が入っていると、言つて三人の息子を馬鹿にする、これは日朝混血児の宿命みたいなもので、その宿命を逃れるためには「国際人」にするより他に道はないとも言つていて、これもまたお、か、ま、をおどろかせることばだった。

つづきは製品版でお読みください。